

【DX戦略書】三行合成樹脂株式会社

2025年9月30日

代表取締役 宮島拓人

目次

- | | |
|----------------|----------------|
| 1. 代表からのご挨拶 | 6. 具体的な取り組み |
| 2. DX推進の背景と目的 | 7. DX推進体制 |
| 3. 企業理念、DXビジョン | 8. DX人材の育成・確保 |
| 4. ビジネスモデルの方向性 | 9. ITシステム環境の整備 |
| 5. DX戦略 | 10.DX戦略の達成指標 |

1. 代表からのご挨拶

当社はプラスチックの製造技術が日本に広がりをみせはじめた戦後の折
その当初から樹脂製品専門メーカーとして成長を続けて参りました。

「技術の三行合成」を標榜し、顧客のお困りごとを独自の技術ノウハウ
を元に解決し続けて今日に至ります。

近年では工場のDX推進に注力することでトレーサビリティ能力を強化し、
高い製品品質に加えて納得できる安心感を武器に各業界のトップランナー
企業と協業をさせていただいております。

高い技術力と工場DXの両輪を磨き続け、進化し続ける中小企業となり
地域社会や樹脂成形業界の成長にも貢献できるよう努めてまいります。



三行合成樹脂株式会社
代表取締役社長 宮島拓人

2. DX推進の背景と目的

当社は製造業におけるデジタル技術の進化が急速に進行する中で、射出成形による樹脂製品製造分野においてもリアルタイムな情報収集・分析、製造工程の自動化・可視化、材料・工程トレーサビリティによる品質保証が競争力の鍵となると認識している。

リスク
・生産設備やシステムへの先行投資が陳腐化し、費用対効果を損なう懸念。
・中小製造業の倒産・閉業が相次ぐ中、下請け的体質からの脱却が進まない場合、価格競争での優位性を失う可能性。
・労働力不足や技能伝承に対するDXの遅れによる業務継続性の低下。

機会
・デジタル技術の活用により、リアルタイムでの生産管理や不良率の低減、納期の柔軟対応が可能となり、顧客満足度と信頼性の向上が期待される。
・トレーサビリティ機能の強化、BCP対応の明確化等により、上場企業に準ずる品質・信頼性を提供できるパートナーとしての地位向上。
・製品企画や金型製造、後工程（組立・塗装・印刷）まで含めた一貫対応体制を強みに、OEMからODM的な展開への移行による事業機会の拡大。

3. 企業理念、DXビジョン

経営理念

プラスチックの可能性を追求し、
モノづくり企業のパートナーとして、
社会へ貢献する

経営ビジョン

80年培った技術と信頼に基づき、
革新的技術に挑戦し続け、
業界トップランナーを目指す

DXビジョン

“スマートファクトリー”へ変革する

4. ビジネスマodelの方向性

経営ビジョン「80年培った技術と信頼に基づき、革新的技術に挑戦し続け、業界トップランナーを目指す」のもと、業務改善にとどまらず、ものづくりの在り方そのものを変革する全社的なDXに取り組んでいます。これを支えるビジネスモデルの方向性として、以下の**2つの柱**を明確にしています。

① 信頼性・品質・安定供給力・製品実現力に優れた 製造受託専門メーカーとしての地位確立

上場企業を含む大手顧客と直接取引できる水準の「品質管理体制」「生産安定性」「トレーサビリティ」を有する企業を目指します。

単なる価格競争ではなく、安心して任せられるサプライヤーとしての評価を獲得し、製造受託における差別化を図ります。

② 川上から川下まで一貫対応可能な 高付加価値型メーカーへの転換

プラスチック部品の製造だけでなく、製品企画段階からの参画、金型設計・製作、後工程（塗装・印刷・組立など）を含めた一貫生産体制を整備し、顧客の開発パートナーとしてトータルコスト低減に貢献します。

特に外注管理を含めた工程全体の最適化により、他社にはない「一括対応力」を強みとします。

ビジネスモデルの方向性2つの柱に邁進することは
DXビジョンに掲げる「“スマートファクトリー”へ変革する」とイコールである。

5. DX戦略（3つの柱）

① 現場の見える化2.0

IoT・センシング技術による現場データの**リアルタイム可視化**

② 全社システムの統合

Web型システム導入による業務の**標準化と一元管理**

③ デジタル人材の育成

人材強化とデジタルによる**技能伝承**

6. 具体的な取り組み

① 現場の見える化2.0

異常発生をリアルタイムに工場稼働ボードへ表示
発生不良の層別とワースト順位を即座に**注意喚起**

② 全社システムの統合

社内**7システム**を単一Web型システムに**統合**
ロットトレーサビリティの実現

③ デジタル人材の育成

熟練技術者の暗黙知をデジタル移行により**形式知へ**
間接部門の**属人化業務も排除・低減**



工場稼働ボード

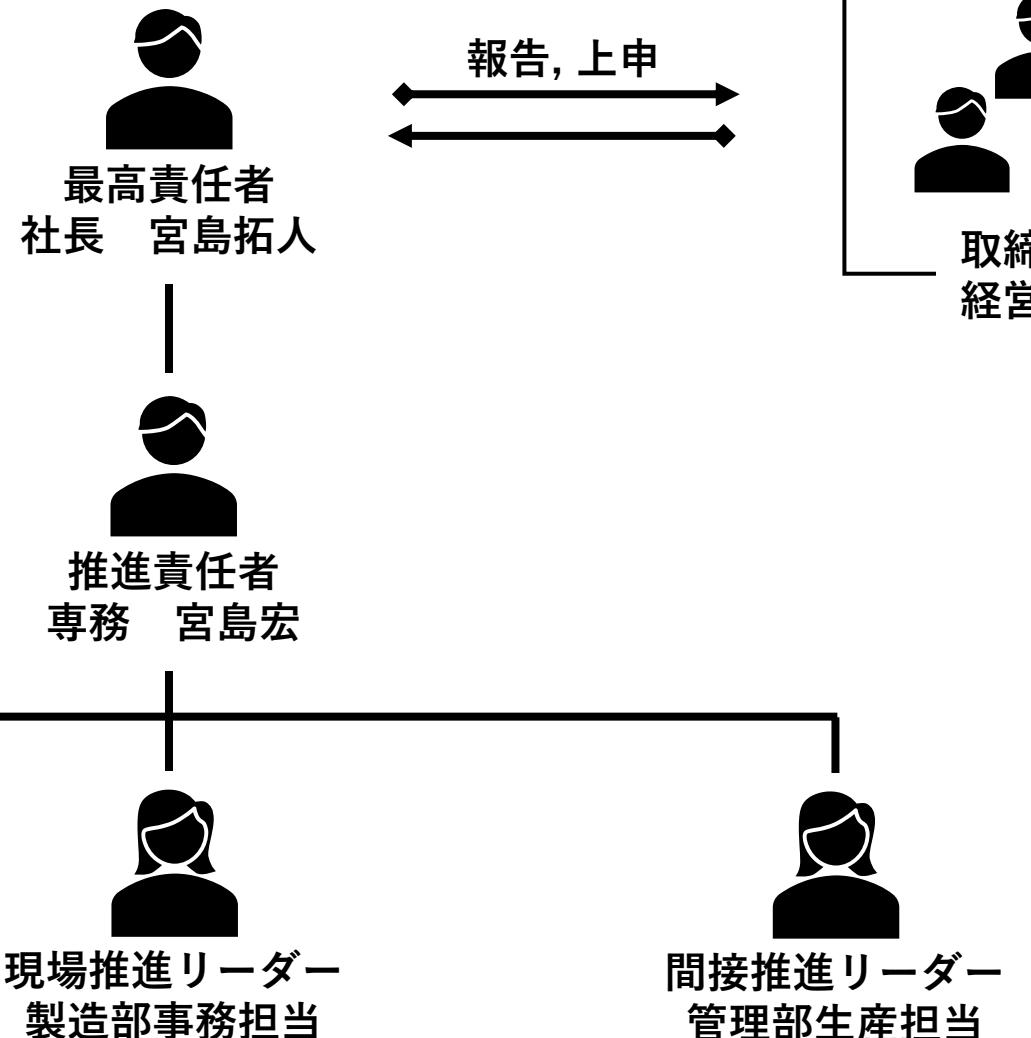
7. DX推進体制

DX推進委員会

+ 外部パートナー

部門横断・社長直轄の組織により
スピーディな変革推進を実行。

対外・実務統括
管理部IT担当



8. DX人材の育成・確保

① 現場DX人材の育成

IoT・データ活用・システム運用等に関する社内研修を定期実施。OJTとeラーニングにより現場リーダー人材のスキル底上げ。

② DX推進人材の採用・配置

システム開発・分析スキルを有する中途人材の採用を継続実施。情報系・理工系学生の新卒採用を強化。

③ デジタル教育の基盤整備

熟練者技術を可視化し、若手人材の教育プログラムとして体系化。成長度合いを定量的に把握し、継続的なスキルアップを支援。

全社への展開イメージ

STEP1. 役員主導・ロールモデル育成

DX推進委員会メンバーが主体となり、DX転換、業務改善を実施。
社員メンバーに教育者/支援者としての知識・意識もOJT/Off-JTにより醸成。

STEP2. コア人材波及

DX推進委員会の社員メンバーが主体で現場の中間管理職・コア人員にDX手法を教育。
役員は評価とサポートに回る。

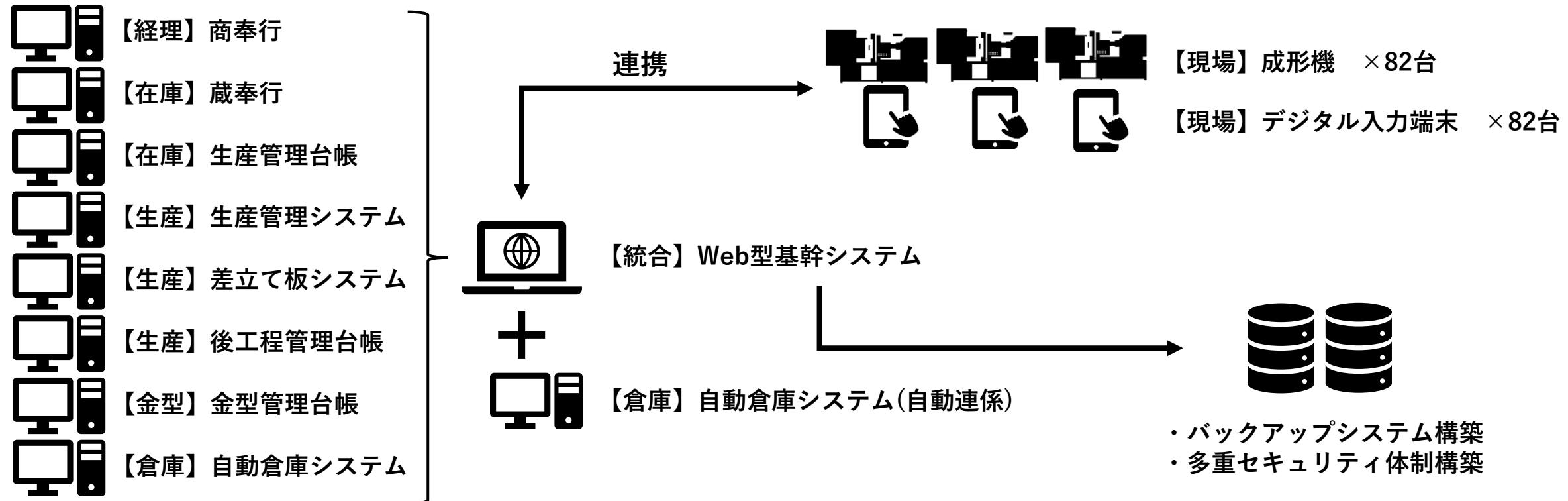
STEP3. 全社員展開・組織風土形成

全社員（正・再雇用・時短・パート他）にDX業務に関わり、会社の標準思考として習得させる。
評価制度を整備し、DX貢献を促進する。

9. ITシステム環境の整備

DX取り組みの根幹となるシステム環境整備として下記3項目について実施済みである。

- ① Web型ERP・MESの導入による全社データ連携の基盤構築
- ② IoTデバイスと連携した設備データの収集・蓄積環境の整備
- ③ レガシーシステムの段階的刷新とサイバーセキュリティ対策の強化



10. DX戦略の達成指標

① 本戦略による 企業価値の創造

- ・不良発生率の低減：対前年比20%削減
- ・月次出荷遅延件数：対前年比50%削減

② DX戦略による 効果

- ・主要生産設備へのIoT設備導入割合：2025年度末95%
- ・工場稼働ボードのコンテンツ進捗度：2025年度末100%
- ・現場異常発生呼び出しへの反応時間：対前年比50%短縮
- ・並行運用旧システムからの完全切替：2025年度1件以上

③ 本計画の進捗度

- ・DX推進委員会の実施回数：1回以上/月
- ・製造/間接部門への月次フィードバック状況：各1件以上/月
- ・外部パートナーとの共同プロジェクト件数：2025年度1件以上



プラスチックの可能性を追求し、
モノづくり企業のパートナーとして、
社会へ貢献する



SANKO PLA